様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　2 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520335
研究課題名（和文）　古アイスランド語における所有表現の研究

研究課題名（英文）　A study of possessive expressions in Old Icelandic

研究代表者
入江　浩司（IRIE KOJI）
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：40313621

研究成果の概要（和文）：
古アイスランド語の所有表現について、中世アイスランドで散文で書かれた「アイスランド人のサガ」と呼ばれる文献を対象として調査した。特に身体名称とその持ち主が同一文中に現れる構造に注目し、(1) 所有の与格、(2) 前置詞による所有表現、(3) 所有関係を表わす動詞、の用例を中心に収集して分析した。その上で、現代アイスランド語の所有表現との対照を行ない、取り上げた表現の大まかな歴史的変遷を考察した。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this study is to describe various possessive constructions in Old Icelandic. The data stem from the Sagas of Icelanders which are written in prose in middle age Iceland. Especially those sentences are examined that contain a human possessor and a body part possessee. The following topics are notably dealt with: (1) the possessive dative, (2) prepositional possessive constructions, and (3) the verbs of possession. Finally, some considerations are provided upon the historical developments of these expressions from Old to Modern Icelandic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：言語学，外国語，アイスランド語，所有表現

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、研究開始の時点までに現代アイスランド語とフェーロー語の所有表現の研究を進めていた。それまでの研究から、密接な系統的関係にある現代アイスランド

語とフェーロー語は、所有に関わる表現にも類似したものが多いが、かなりの差異も見られることが判明していた。特に目立った違いを挙げれば、(1) 両言語とも所有者と所有物のあり方を前置詞を使用して明示する構造が頻出するが、双方で前置詞の種類とその用法が大きく異なる、(2) 前置詞による所有表現における所有者を表す名詞類の、いわゆる名詞句階層上の位置が両言語でかなり異なる、(3) アイスランド語では本来の属格が所有表現においても保たれているのに対し、フェーロー語では本来の属格が衰退し、別の形式が生じつつある、(4) いわゆる「所有の与格」がアイスランド語では前置詞句内の名詞を修飾する用法として存在するのに対し、フェーロー語ではそうした与格の用法がほとんど見られない、等である。こうした両言語の違いがどのようにして生じたかを明らかにするためには、言語の歴史をさかのぼった研究が必要であると考えた。

アイスランドやフェーロー諸島に植民が行なわれて間もない時期（10 世紀頃）には、アイスランド語とフェーロー語の言語的違いも僅かであったと考えられる。しかし、フェーロー諸島には 18 世紀以降の文献しか残されておらず、言語の歴史的変遷をたどるのが困難である。それに対してアイスランドには 12～13 世紀を中心に記録された中世の言語資料が豊富に残されているため、まずは古アイスランド語の資料を調査し、この言語の所有表現を共時的に記述することに努め、そうした上でアイスランド語の歴史の中で、中世の言語から現代語へと至る所有表現の歴史的変遷を探りたいと考えた。また、それに照らすことでフェーロー語の所有表現に見られる古い要素と新しい要素を見分けることも可能になると想定した。

所有表現は文法のさまざまなレベルに関わるため、一般的な文法記述ではまとまった扱いをとりにくいことが原因と思われるが、従来のアイスランド語の文法書では、所有に関するまとまった記述があまり見られなかった。これを補うため、本研究課題では、特に所有表現に焦点を当ててアイスランド語の文法記述を試みたいと考えた。

２．研究の目的

12～13 世紀を中心にアイスランドで書かれた散文文献の言語を対象とし、この言語の所有表現に関わる文法現象を共時的に記述することを第一の目的とした。中世アイスランドの文献資料は膨大であるが、本研究課題では「サガ」と呼ばれる散文作品のうち、質量ともに充実した主要なジャンルである「アイスランド人のサガ」と総称される一連の文献を分析の対象とした。

文法記述で取り上げる主要なトピックとしては、(1) 所有の与格、(2) 前置詞による所有表現、(3) 所有関係を表わす動詞、などを予定した。

その上で、この言語の末裔であり、研究代表者が研究を進めてきた現代アイスランド語およびフェーロー語の所有表現との比較対照を行なうことにより、中世の言語から現代語へ至る文法現象の歴史的変遷を考察することを目標とした。

３．研究の方法

まずは古アイスランド語のテキストの標準的な校訂本等の一次文献の収集、および古アイスランド語を扱った研究書や論文等の二次文献の収集を行なった。また、CD-ROM 等の形で電子化された資料も積極的に入手するよう努めた。2008 年度にはアイスランドで調査を行ない、現地の大学・図書館等で、日本で入手できなかった資料の収集に努めた。

研究においては、一次文献を精査し、問題となる表現の用例収集を行なうことに最も多くの時間を費やした。その際、紙媒体のテキストに加え、電子化されたテキストが存在する場合はそれを併用することで、特定の語句や表現について、できるだけ漏れのないように用例収集を行なうことに努めた。

文法の記述においては、主として記述言語学や言語類型論の立場からの所有表現に関する研究を参照し、一般理論の動向を把握するとともに、記述の方法を参考にした。

４．研究成果

以下、(1) 所有の与格、(2) 前置詞による所有表現、(3) 所有関係を表わす動詞、(4) 所有者の標示、について研究結果を概観した後、(5) 現代アイスランド語との対照による歴史的発展に関する考察を述べ、最後に(6) 今後の課題について触れておく。

(1) 所有の与格

古アイスランド語の *hǫggva í hǫfuð honum* ‘hew in head:ACC him:DAT’「彼の頭に斬りつける」といった例のように、前置詞の目的語である名詞句の修飾成分として所有者を表す与格名詞句が現れるものを検討した。なお、アイスランド語では、いわゆる「所有の与格」は、基本的に、このような前置詞句内の名詞を修飾する用法でしか現れない。

問題となる表現の「動詞＋前置詞＋名詞句＋与格名詞句」という構成要素について、調査で明らかになったことは、次の点に要約さ

れる:① 前置詞の目的語については、(a) 主に身体名称や物の部分を表わす普通名詞が現れ、(b) 接尾辞定冠詞がつくのは稀であり、(c) 修飾成分が現われる場合は「右」「左」などの限定の表現に限られる。② 与格名詞句については、(a) 代名詞や固有名詞（人名）が多く、(b) 形態的・意味的に「定」であり、(c) 修飾成分としては属格名詞の例しかなく、(d) 意味的に有生性の高いものが多いが、そうでない例もある。③ 前置詞については、動作の向かう方向や起点を表わすものが多い。

上記の表現の前置詞の目的語の位置に現れる名詞句の種類については特に詳しく検討し、先行研究では単に身体名称・衣類を表す名詞であるとされていたが、本研究では、どのような身体名称が高頻度で現れるかを示すリストを作った。そして、「衣類」の例が実際には極めて少ないことを指摘し、一方で、物（無生物）の全体が与格で標示され、その部分を表す名詞が前置詞の目的語として現れる場合があることもわかった。

(2) 前置詞による所有表現

所有物を表わす名詞句の直前または直後に、前置詞 *á*「～の上」や *í*「～の中」を用いてその所有者が表わされている用例を収集して分析を進めた。その結果、例えば *rista á honum kvið-inn* ‘cut on him:DAT belly-the:ACC’「彼の腹を切り裂く」のように、動作の対象となる身体名称の直前にその所有者を表わす前置詞句が現れる例が多いのに対し、*lemja sundr hvert bein í honum* ‘beat asunder each bone:ACC in him:DAT’「彼の骨をことごとく折る」という例のように、身体名称の直後にその所有者を表わす前置詞句が置かれる例は極めて少ないことが判明した。

現代アイスランド語では後者のように、所有物（身体名称等）の直後に所有者を表わす前置詞句が現われる語順の表現も頻繁に使用されており、この点で傾向が異なるということが指摘できる。

(3) 所有関係を表わす動詞

動詞 *eiga*「もつ、所有する」と *hafa*「もつ」が所有関係を表わす動詞として使用されている用例を集めて検討した。その結果、すでに先行研究でも指摘されていることであるが、動詞 *eiga* は親族関係を表わす他、財産や人材など、持ち主がその所有に責任を負うようなものについての所有関係を表わし、一方、動詞 *hafa* は所有物の一時的な保持に焦点をおいた表現であることが確認できた。

現代アイスランド語では、もう一つの所有動詞的な表現として、be 動詞と前置詞を組み合わせた表現（*vera með ACC* ‘be with ACC’「～を（身につけて）もっている」）が発達しているが、古アイスランド語ではこの表現がほとんど見られないことも判明した。

(4) 所有者の標示

所有表現において頻出する身体名称や身につける物が、文中で所有者との関係を示すのにどのような標示を受けるかを検討した。その結果、身体名称と、剣など身に帯びている物（身体との密着度の高い物）を比べた場合、身体名称の方が何らかの形で所有者の標示を伴うことが多く、また、特に身体名称が前置詞句内に現れた場合は、所有者を与格で表わすことが非常に多くなるといった点で、身体名称が一般的な所有物と異なる傾向を示すことがわかった。

(5) 現代アイスランド語との対照

上記のような古アイスランド語の状況を、現代アイスランド語のデータと比較対照した結果を述べておく。なお、ここでは所有表現の代表的なものとして、身体名称（所有物）とその持ち主（所有者）の現れ方に限定し、①所有の与格、②前置詞句の位置、③前置詞 *með* を用いた表現、④複合動詞、について述べておく。

①所有の与格

上記(1)に述べたように、いわゆる「所有の与格」は、古アイスランド語では特に身体名称の持ち主が前置詞句で表わされる場合に多用されるのに対し、現代アイスランド語では、出現箇所の傾向は変わらないものの、頻度が低く、成句的表現や書き言葉に限定されるようになっていると見られる。

②前置詞句

上記(2)に述べたように、動詞とその目的語としての所有物（身体名称）と、その所有者を表わす前置詞句の位置関係として、(a)「動詞＋前置詞句（所有者）＋所有物」と、(b)「動詞＋所有物＋前置詞句（所有者）」の二つの語順を区別して検討した。

(a)の語順は、古アイスランド語でも現代アイスランド語でも、頻繁に用いられる。他方、(b)の語順は、古アイスランド語にはあまり見られないが、現代アイスランド語では(a)と同程度に頻繁に用いられている。すなわち、(b)の「所有物＋前置詞句（所有者）」のまとまりが、現代アイスランド語では一つの構成素として機能しているが、古アイスランド語では、まだそのような状態にはなかったことが推測される。

③前置詞 *með* を用いた表現

上記(3)に述べたように、*vera með ACC* ‘be with ACC’ が「～をもっている」という所有

動詞に相当する表現として現われるかどうかを検討したところ、現代アイスランド語ではこれが多用される一方で、古アイスランド語ではこれがほとんど見られなかった。

④複合動詞
現代アイスランド語では、*fótbrjóta ACC* ‘foot.break ACC’「～の足を折る」（＜fótur「足」＋ brjóta「壊す、折る」）のように、複合動詞の第一成分が身体名称で、その動詞の目的語として身体部分の持ち主が現れる一連の動詞がある。古アイスランド語についてこのような動詞があるかどうかを調査してみた結果、その存在は確認できなかった。

以上の古アイスランド語と現代アイスランド語の対照結果を、大まかな傾向として表にまとめると、次のようになる。

	古アイスランド語	現代アイスランド語
①	多い	成句的表現･書き言葉に限定される
②a	多い	多い
②b	少ない	多い
③	見られない	多い
④	見られない	特定の動詞で頻出

(6) 今後の課題
本研究では、人間を表わす名詞を所有者とし、身体名称を所有物とする表現に主として注目して研究を進めた。この場合に特に多くの構文バリエーションが観察されるからである。しかし、所有者と所有物の種類には、他にもさまざまな組み合わせがあり、所有表現の全貌を捉えるにはさらに詳細な調査が必要である。
歴史的な考察においては、本研究で扱った所有表現の一部に関しては、古アイスランド語から現代アイスランド語への大まかな流れが推測できるものの、古アイスランド語と現代アイスランド語の間に位置する時代の言語状況を調査してみなければ、何ら確実なことは言えない。また、所有構文について、現代アイスランド語とは異なるバリエーションを持つフェーロー語との対照については、まだ手つかずのままである。こうした点は、今後の研究の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 入江浩司，古アイスランド語の連体修飾の与格について，金沢大学文学部論集言語・文学篇 28(2008)，65-78，査読無.

〔学会発表〕（計１件）
① Irie, Koji, Transitivity in Modern Icelandic -st Reciprocal Verbs, The Árni Magnússon Institute of Icelandic Studies, 2008.9.2, University of Iceland (Iceland).

〔その他〕
ホームページ等
金沢大学学術情報リポジトリ：
http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/handle/2297/9721

６．研究組織
(1)研究代表者
入江　浩司（IRIE　KOJI）
金沢大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号：40313621

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし